

# High Performance Sport Newsletter Vol.29 2017

## ハイパフォーマンスセンター構築にあたって



リオ2016オリンピック・パラリンピックでの活動について

第13回JISSスポーツ科学会議

「オリンピック・パラリンピックとスポーツ医・科学—RioそしてTokyoへ—」

2016年4月のハイパフォーマンスセンター構築にあたり、ニュースレターの名称を「JISS」から変更いたしました。

就任挨拶

### 意志が未来を拓く 新たなチャレンジに

勝田 隆 ハイパフォーマンスセンター長 (国立スポーツ科学センター長)



2017年1月1日にハイパフォーマンスセンター(HPC)長を拝命し、同時にJISSセンター長を兼務することとなりました。2001年のJISS開所から密接な関わりを持ちつつそこに身を置いてきた私にとって、NTCを含めた「西が丘地区」は特別な場所です。

この機に臨むにあたり、私は以下のようなキーワードを行動の軸として掲げます。

①共有：今、HPCに何が求められているのかを確認し、その情報を広く共有することから始めたいと考えています。パラリンピック競技が加わるなど日本スポーツにおける強化と研究の中核拠点として、JISSとNTCのさらなる一体化と機能強化が重要であり、HPCには新たな役割が生まれています。これらの変化は、社会のスポーツ界への期待が色濃く反映されているものと捉えることができます。これらの期待を発展的に認識し、関係者と分かち合っていくことはこれから私たちが進むべき道を指し示す羅針盤の役割を果たすことになるでしょう。

②影響力：現在、トップスポーツは世界が共通して育んでいかなければならない重要な文化の一つとなつていきます。その主役であるトップアスリートを中心に据えたさまざまな取り組みが社会に与える影響は、非常に大きく、広範かつ普遍的なものであることに疑問の余地はないでしょう。併せて外部からの刺激(情報等)を柔軟かつ敏感に取り入れる感受性とシステムを高めることも大切です。その機能と能力を磨き、HPCが日本のスポーツのみならず、世界のスポーツの発展に寄与する拠点の世界的なロールモデルとして成長していくために、関係者の英知をさらに結集したいと思っています。

③検証：近年の日本のトップスポーツは、関係する多くの方々の努力により国際大会でのメダル獲得数が増えるなど肯定的な方向に進んでいると思われまふ。さらなる前進のためには、「過去」および「現在」というステップをしっかりと検証することが重要です。この揺らぎのない足場を踏みしめてこそ5年後、10年後の人たちがスポーツ界の発展のために果敢にチャレンジし続けてくれるための種を蒔く作業になると考えています。

④リーダーシップ：HPCが世界のスポーツをリードする真の拠点として発展していくためには、ここに関わるすべての人々が、それぞれの立場を認識し、「誰もが持たなければならぬリーダーシップ」を発揮しようとする姿勢が大切ではないかと考えまふ。まず、私自身がその具体的な姿勢を示すことが必要だと認識しています。内外の声に真摯に耳を傾け、関係者とともに未来に向けた歩みを具現化する。それが、私に求められている仕事でもあると思つていきます。

退任挨拶

### 日本のスポーツ医・科学の中心として JISSのさらなる発展を!

川原 貴 前国立スポーツ科学センター長



私は1976年に東京大学医学部を卒業した時から日本体育協会スポーツ診療所で週1回内科外来を担当し、1977年ニバシアード大会に初めて日本選手団本部ドクターとして参加しました。それ以来、日本の選手強化に医・科学の立場から長年携わってきました。こうした経験を知見を求められ、1999年にJISS設置準備室の室長として赴任しました。JISS設置準備室の時には、設計や設備の見直しなどさまざまな問題があり大変苦労しました。

JISS設置後、2004年アテネ、2008年北京までの7年間は本当にガムシャラに走った印象です。当初は医・科学と現場が果たしてうまくいくのか、という懸念もありましたがアテネオリンピックでJISSを拠点とした競泳、体操の活躍もあり、徐々に競技団体の信頼を得られるようになっていきました。

私自身、長年、医・科学に携わってきましたが、医・科学だけではやれることが限られています。競技団体の強化、競技者育成がしっかりしていないとサポートしても結果につながりません。競技団体が強化を考える上で、拠点のあるなしは非常に大きいですが、リオ2016オリンピックで獲得したメダル41個のうち40個はNTCを拠点としている競技でした。そういう意味でもNTCとJISSが隣接していることが効果をもたらしていると思えます。

東京2020大会、またそれ以降に向けて、JISSは研究と医・科学サポートをさらに充実させていく必要があります。パラリンピックへのサポートは始まったばかりで、これから本格化していくところです。研究では先端の研究をしている大学や企業などとの連携を進め、外部の研究者、大学院生を受け入れていくと良いと思います。

医・科学サポートでは、ジュニア競技者の育成にも貢献していく必要があります。JISSがトップレベル競技者と同じようにジュニア競技者を直接サポートするのは無理ですが、トップ競技者で得られた知見をジュニア競技者の育成に活用できるよう情報提供していく必要があります。ジュニア競技者の育成は都道府県の団体強化など、地域も担っています。JISSは都道府県の医・科学センターや都道府県体育協会の医・科学委員会などと連携を図ることも重要です。日本のスポーツ医・科学の中心としてJISSのさらなる発展を祈っています。

# ハイパフォーマンスセンター構築にあたって

## ハイパフォーマンスセンター基盤整備で 日本スポーツ界の総合力アップを！

高谷 吉也（独立行政法人 日本スポーツ振興センター 理事）

（独）日本スポーツ振興センター（JSC）は、2016年4月から国立スポーツ科学センター（JISS）と味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）を中心とした東京都北区西が丘のスポーツ関連施設一帯を「ハイパフォーマンスセンター（HPC）」と位置付け、日本スポーツの国際競争力強化に向けた施策を推進していくことになった。

「今まで西が丘地区には、JISSという医学・科学研究支援の機能があり、NTCとスポーツ開発事業推進部が併設されていました。2020年には自国開催の東京オリンピック・パラリンピックもあるため、これらの機能を向上させ、進化し続けることが重要という考えから今回、HPCとして再スタートを切った訳です。2016年10月にスポーツ庁の鈴木大地長官が出された競技力強化の指針である『鈴木プラン（競技力強化のための今後の支援方針）』の中にも、HPCの機能強化が盛り込まれています。」

HPCを戦略的に動かすためには、競技団体とのコミュニケーションの円滑化、協働体制の確立も大切です。そこで今回、新たに「ハイパフォーマンス戦略部」を設置しました。同戦

確かに近年、各競技のトップアスリートがJISSでケガのリハビリを行うケースが大幅に増えた。年間何十人、何百人という選手が治療・リハビリ・トレーニングをしているのだから、そのデータを集積していけば、似たような症例が出た場合、すぐに対処できるようなことはあるはず。1人の選手の回復に携わるドクター、トレーナーもスタッフも数多くいるだけに、全員が同じ情報を共有していた方が競技復帰への道も早くなるだろう。そういった意味でも、トップアスリートのデータ管理の一元化は早急を実現しなければならない事項。高谷理事もその重要性を強調していた。

この3センターが一体となるHPCがスムーズに稼働すれば、日本スポーツ界の総合力がアップするのは間違いない。東京2020大会の成果も大いに期待される。ところが、多少なりとも課題も残されているという。

「近年の西が丘地区の拡充によって、NTCのトレーニング場に映像システムが設置され、その設備を活用しながらトレーニングもできるようになってきました。しかし、西が丘に練習拠点がなく競技団体（冬季競技、海洋・水辺系、一部屋外競技を除く）もありません。東京2020大会の正式種目で言えば、ビーチバレー、空手、スポーツクライミングなどが該当します。こうした種目はHPCの機能を使いながらサポートしていくのが難しい面があります。それをどう改善し、メダルの可能性を高めていくかというのは考えるべきテーマの1つでしょう。」

もう少しでメダルに手が届きそう

略部は日本オリンピック委員会（JOC）、日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会（JPC）と連携し、競技団体とコミュニケーションを密にして、各競技団体の強化計画を軽快なフットワークで支援できるように準備、検討を進めているところです。2017年から本格稼働していくことになると思います」と高谷理事はこれまでの経緯を説明する。

今後の日本スポーツ界発展のカギを握るHPCだが、2017年から新たに①スポーツインテリジェンスセンター、②スポーツ技術・開発センター、③アスリート・データセンターの3センターが設置される予定だ。

①のスポーツインテリジェンスセンターは、世界各国のメダル獲得戦略、選手強化方法などあらゆる情報を先行して収集し、研究・分析結果を競技団体の強化戦略プランに反映させ、大会でのベストパフォーマンスへとつなげていくことを目的としている。

「過去の例を挙げると、柔道女子52kg級の中村美里選手が北京2008大会準決勝とロンドン2012大会2回戦で北朝鮮の安琴愛（アングメ）選手に敗れたことがありました。安選手はあまり国際試合に出場しなかったため情報が少な

な競技のレベルを引き上げていくことも重要な課題です。フェンシング、トランポリン、新体操、といった種目が好例です。ターゲット種目に選定されているかどうかもありますが、各競技団体と連携を深めながら強化を一掃になつて考えていくことも必要だと思います。」

東京でオリンピックが開催されるのは1964年以来、56年ぶりとなる。前回は第二次世界大戦からの日本の復興と近代国家の仲間入りを世界に印象づける大会となったが、今回は成熟した日本のテクノロジーや社会基盤を示すいい機会になる。HPCは日本のスポーツに関するハイテク技術が結集されたものであり、非常に大きな意味を持つ。HPCの動向が東京2020大会の成否を大きく左右すると言っても過言ではない。

高谷理事も3年後に向けて、神妙な面持ちでこう語っていた。

「鈴木長官が就任されてから、JOC、JPC、JSC、日本体育協会、スポーツ庁による『5者懇談会』が設けられました。この5者が集まって情報共有を進めるとともに、2020年をチームジャパンとして一緒に戦っていく流れを作っていくという意識が高まっています。HPC、ハイパフォーマンス戦略部もそうですが、みんなで一体化して協力体制を作り、同じ方向を見て進んでいくことが、今後に向けて非常に大切なことだと考えています。」

チームジャパンの底力を結集して、HPCを最大限活用し、平昌2018冬季大会、東京2020大会での日本の活躍を期待したい。

く、彼女のような未知なる逸材というのは世界中にいます。こうした隠れた情報を掘り起こすことは、日本の国際競争力強化にとって非常に重要です。」

陸上にしても、アフリカ勢が本格的な強化に乗り出し、中長距離種目でも躍進していますが、その背景を探ることも、日本のレベルアップに必要な不可欠です。」

多岐にわたる輝かしい成果を残しているメダル大国のアメリカやドイツ、イギリスの強化情報を入手することも、重視しなければいけないテーマでしょう。

こうした役割を担うのが、スポーツインテリジェンスセンターです。機密情報のスカウティングは難易度の高いことですが、それを遂行できる体制をさらに充実させていくことも肝要でしょう」と高谷理事は力強く語る。

一方、②のスポーツ技術・開発センターは、メダル獲得が有望視されるアスリートの技術開発サポートがメインテーマになる。

「2013年に完成した風洞実験棟が、技術開発サポートの助になっているのは事実です。冬季競技のジャンプやスピードスケート、夏季競技の

自転車、アーチェリーなどは風の影響を受けやすい競技。自転車などは隊列やポジション、フォーム次第で負荷のかけ方が全く違ってきます。この施設を生かしながら、最大のパフォーマンスを出せるように強化を図ることが、今後の重要ポイントの1つと言えます。」

一方、パラリンピックに関しては、用具を使う競技がほとんど。車いすを筆頭にさまざまな用具の改良を進めていかなければいけません。それは私たちだけの力ではできないので、大学や企業などの研究機関との協力体制を構築していくことが大切だと思います」と話す。

③のアスリート・データセンターについては、HPCにおけるメディカル、フィットネスチェック、競技映像、栄養などアスリートに係る各種情報を一元的に管理し、トップアスリートが必要

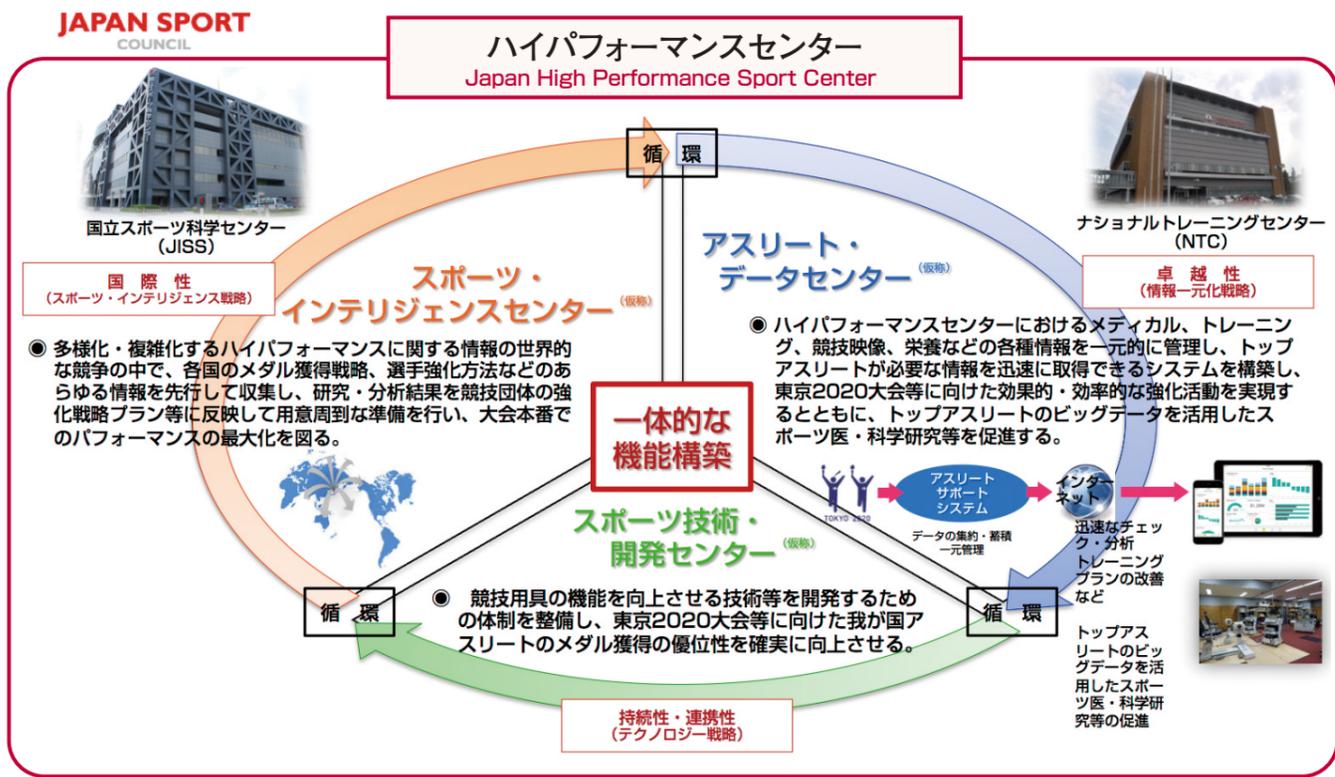
な情報を迅速に活用できるシステムを構築していくことが大切だと思います。」

「私たちがこれまで蓄積していたデータは、メディカル、フィットネス、競技映像、栄養、トレーニングといった各システムがバラバラだったため、決して使い勝手がいいとは言えませんでしたが、アメリカなどはトップアスリートの全データが一元的に管理されていて、ケガの治療履歴やどのようなトレーニングの内容などがすぐに検索できるようなっています。日本でも共通プラットフォームを作って、トップアスリート本人、あるいは関係者が欲しいデータをすぐに引き出せるようにするのが望ましいと考えています」と今後のビジョンを口にする。



### ハイパフォーマンスセンターの基盤整備（全体イメージ）

「ハイパフォーマンスセンター」の機能強化を図るため、以下の3センターを新たに設置し、中長期的観点から我が国の国際競争力を強化していくための基盤を整備する。



# リオ2016オリンピック・パラリンピックでの活動について

## リオ2016大会のノウハウを 東京2020大会につなげることが重要

トピマス・バイネルト（ハイパフォーマンスセンタースポーツ開発事業推進部  
ハイパフォーマンスサポート事業 統括マネージャー）

2008年から文部科学省の委託事業としてスタートしたマルチサポート事業。2015年10月にスポーツ庁が発足した後も同事業が引き継がれ、2016年4月からは「ハイパフォーマンスサポート事業」と名称が変更。より充実した体制でトップアスリート支援が行われるようになった。

### ハイパフォーマンスサポート事業

#### ①アスリート支援

強化合宿や競技大会における動作分析、ゲーム分析、情報収集、栄養サポート、コンディショニングサポート、心理サポートなど、各分野の専門スタッフが、スポーツ医・科学、情報等を活用して、トップアスリートが試合に勝つために必要なサポートを実施。

#### ②研究開発の実施

わが国の科学技術を活用して、選手専用（テラーメイド型）の競技用具やウェア、シューズ、日本人の弱点を強化するための専用トレーニング器具、コンディショニング、疲労回復方法等の研究開発を実施。

#### ③ハイパフォーマンスサポート・センターの設置

2016年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会において、競技直前の準備のためにアスリート、コーチ、サポートスタッフが必要とする機能（リカバリーやコンディショニング機能に重点化）を選択できる拠点「ハイパフォーマンスサポート・センター」を設置。

ハイパフォーマンスサポート事業の統括マネージャーのバイネルトは、まず①の概要をこう説明している。「アスリート支援は、スポーツ医・科学、情報分野等の専門スタッフがターゲット競技種目の選手に対して、試合に勝つために必要なサポートを実施します。強化計画は各競技団体が策定し、どのようなサポートが必要であるかを話し合っただけです。」

た、選手の身体のケアを行うサポートも多々行っています。リオ2016オリンピックで日本選手団は、12個の金メダルを獲得しましたが、そのすべてがターゲット競技種目でした。北京からロンドン、リオと8年間サポートを継続した1つの成果ではないかと思えます。」

③のHPSCに関しては、オリンピック・パラリンピックの開催期間に、選手やコーチ等が競技直前の準備のためのコンディショニング等を行うことを目的として、現地を設置された施設で、ロンドンやソチの両大会でも「マルチサポート・ハウス」として設置した実績がある。「オリンピックのHPSCはスポーツクラブの施設を利用して設置しました。選手村から車で30分ほど離れていたが、選手の負担を軽減し、利便性を向上させるためにシャトルバスを運行しました。」

「日本食を食べ、リラックスして試合に臨むことができた」「交代浴やサウナのおかげで減量がスムーズにでき、疲労も回復した」といった選手からの声もあり、高評価を受けたと言っている。一方、パラリンピックのHPSCは今回初めて設置された。8月31日～9月18日の開設期間で、延べ利用者数は738人、16競技団体の利用があったという。

「東京2020大会では、自国開催ならではのサポート体制を構築する必要があります。スポーツ庁や日本オリンピック委員会、日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会、各競技団体等との連携を密にして、準備を進めていきます」とバイネルトが強調する。これまでも、これまでの経験を踏まえた今後の取り組みが何よりも大切だ。



## 「アスリート育成パスウェイ」で世界をリードする

船先康平（ハイパフォーマンスセンタースポーツ開発事業推進部  
アスリートパスウェイの戦略的支援事業 専門スタッフ）

次世代の日本のスポーツ界発展のため、考えていかなければならないのがアスリート育成パスウェイだ。アスリート育成パスウェイとは、将来性の豊かなアスリートまたはアスリートからメダル獲得の潜在力を有するアスリート（メダルポテンシャルアスリート）までの育成の道筋のことを指す。アスリート育成パスウェイにおいて重要な考え方は、メダルポテンシャルアスリートまでの道標を明確にした上で、それぞれの道標の到達に必要な構成要素を総合的かつ戦略的に整えるという考え方である。その支援をすることが、JSCが行う重要な取り組みの一つである。

成パスウェイを考えていく上で有益な情報になると思います」と語っていた。②、③の現地調査はアスリートパスウェイの戦略的支援事業の専門スタッフが行った。②においては、8月14日～18日にかけてブラジルオリンピック委員会が東京2020大会の代表候補と位置付けている若手アスリートをリオ2016大会に帯同させるプログラムに同行し調査を行った。③の調査は、9月7日～11日に国際競技団体やパラリンピックスポーツ関連団体関係者からの東京2020大会での実施競技種目、クラス分けなどの情報収集や陸上競技、自転車、パワートレーニング、水泳などの競技視察による情報と①を合わせたことで多面的な分析を行った。

人々を2回に分けて体験型教育プログラムに参加させています。そのプログラムを私たちも視察しましたが、選手村の環境、過去のオリンピックとの触れ合い、現役アスリートとの交流、サポートスタッフとのコミュニケーションという4つの柱で構成されており、非常に意義深いものだと感じました。パラリンピックにおける調査では、実施種目やクラス分けが大会ごとに変更されるので、できるだけ早く情報を入力することの重要性を再認識しました。出場選手のレベルもどんどん上がっていますし、用具の質も向上しているのでも、その情報を得ることも大切だと分かりました」と船先は話していた。

ブラジルの事例を日本ですぐに実行するのは難しいが、この事業の委託団体である（公財）全日本柔道連盟では、2017年2月のグラッドスタムパリティ大会に若手アスリートを帯同させ、現地の同世代のアスリートとのトレーニングの実施、競技会を活用した疑似体験型教育プログラムを実施した。柔道のような試みをしたと考えている競技団体は他にもあるはず。JSCとしてはリオでの情報戦略活動も含め、アスリート育成パスウェイに関わる情報を発信し、競技団体とともに考えていくつもりである。

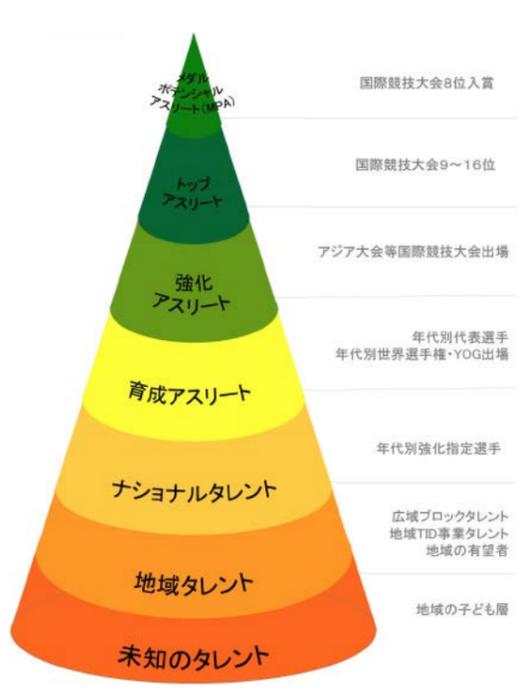
年以上取り組んできた。現在では、JSCと連携する地域は24となり、2020年以降に向けてさらに優れたアスリートの卵を見出す動きが活発化するはずと考えている。「私たちは、競技団体、地方自治体など多くの組織と協働してメダル獲得に貢献できる発掘・育成システムを作ろうとしています。これは、世界との競争があることはもちろん、多くの人を巻き込む必要があること、今の取り組みの成果がいつ得られるかも分からない場合も多く、悩みは尽きません。しかし、優れた発掘・育成システムを作ること、より多くのアスリートやコーチの役に立つ可能性があるため、やりがいと将来に対する責任を感じる仕事です」と船先が言うように、日本型アスリート育成パスウェイが構築される日が待ち遠しいものである。



JSCでは「アスリートパスウェイの戦略的支援」事業の一環で、リオオリンピック・パラリンピック情報戦略活動として、①データブックの作成、②オリンピック現地調査、③パラリンピック現地調査の3つを行った。

①のデータブックの作成に関しては、インターネット上に公開されている各競技メダリストのプロフィール等を調査し、どのような成長過程を経てトップレベルに到達したのかを分析した。具体的には、オリンピック・パラリンピックともに各競技のメダリストを抽出し、オリンピックであればメダリストの体型や競技開始年齢、過去の競技経験などを競技ごとにまとめたデータブックを作成した。また、パラリンピックにおいても、各競技のメダリストの競技開始年齢はもちろんのこと、クラス分けに関する情報も整理している。船先は「データブックは本事業の成果の一つであり、アスリート育

将来性の豊かなアスリートを発掘することも重要なテーマの一つ。タレント発掘・育成の先進的な取り組みをしているオーストラリア国立スポーツ研究所（AIS）を参考に、JSCは福岡県と連携してタレント発掘・育成事業に12





# 第13回 JISSスポーツ科学会議 開催

## オリンピック・パラリンピックとスポーツ医・科学

### —RioそしてTokyoへ—



### 第13回JISSスポーツ科学会議 プログラム

- 開会のあいさつ  
大東 和美 (JSC理事長)
- シンポジウム①  
「リオオリンピックまでの4年間のJISS医・科学サポート」  
「近年のJISSの医・科学支援の基本方針と現状」  
窪 康之 (JISS研究員)  
「レスリング競技のサポート」  
山下 大地 (JISS研究員)  
「陸上競技のサポート」  
松林 武生 (JISS研究員)  
「栄養グループのサポート」  
亀井 明子 (JISS研究員)
- シンポジウム②  
「パラリンピックにおける医・科学サポート—リオまでのサポートから学ぶこと—」  
「医・科学サポートの立ち上げとフィットネスチェック」  
石毛 勇介 (JISS副センター長)  
「トレーニングサポート」  
大石 益代 (JISSトレーニング指導員)  
「アスリート支援—理学療法士の立場から—」  
笹代 純平 (JSC)  
「リオパラリンピックでの経験とJISSに望むこと」  
若杉 遥 (立教大学)  
「リオ2016パラリンピックにおける医学サポートとJISSに望むこと」  
羽田 康司 (筑波大学)
- ポスターセッション  
開会のあいさつ  
川原 貴 (JISSセンター長) (敬称略)

「第13回JISSスポーツ科学会議」が開催された。

リオデジャネイロ2016大会には、JISSからも現地に設置されたハイパフォーマンスサポートセンターや競技会場へ多数のスタッフを派遣し、選手や競技スタッフのサポートを行った。今回のスポーツ科学会議では、「オリンピックパラリンピックとスポーツ医・科学—RioそしてTokyoへ—」をテーマに、ロンドンからリオまでの4年間の活動を振り返るとともに、次の東京2020大会に向けた課題などが発表・議論された。

会議は、JSC理事長・大東和美が「リオ2016大会は、東京2020大会に向けて、それぞれの課題などが浮き彫りになった大会であった。本会議が平昌2018冬季大会、東京2020大会、そして2020年以降の日本人選手のさらなる活躍につながる有意義な会議となることを期待している」と挨拶し、開会した。

午前中に行われたシンポジウム①では、大阪体育大学体育学部教授の梅林薫氏を座長に、「リオオリンピックまでの4年間のJISS医・科学サポート」と題し、4年間のサポートを4名の研究員が発表した。その後、総合討論を行い、東京2020大会に向けたサポートの課題を抽出するとともに今後のJISSのサポート活動の方向性を参加者と情報共有した。

まず、石毛研究員が「医・科学サポートの立ち上げとフィットネスチェック」について発表した。障がい者アスリートに対してのJISSの取り組みは2012年から始まり、サポートが本格化したのは2015年頃からである。利用に向けた施設整備ならびに体制の整備として、専門スタッフの配置をして障がい者アスリートに対応する体制を整えるとともに、バリアフリー化を進め受け入れ体制を整えた。フィットネスチェックなど各種事業のトライアルについてはアルペンスキー・クロスカントリー・スキー競技のサポート事例について紹介した。

大石益代トレーニング指導員(JISS)は「トレーニングサポート」について発表した。障がい者アスリートを受け入れるということが初めてだったため、試行錯誤しながらサポートを実施した。パラリンピックのサポートについては実施していく中でメディカルとの連携が非常に重要だということが分かったという。メダル獲得に向けて、障がい者アスリートに対しての理解を深め、工夫をし、フィジカル強化に尽力していくことが今後の課題であるとした。

笹代純平(JSC)は「アスリート支援—理学療法士の立場から—」と題し、リオ2016パラリンピックまでのアスリート支

援、ケア分野の活動報告、パラリンピック競技の中でも特に重度障がい者のスポーツであるボッチャのサポート事例、HPCが今後、重度障がいのアスリートを受け入れる上で配慮する点について発表した。

続いて、実際にリオ2016パラリンピックに出場した若杉遥氏(ゴルフ代表)が「リオパラリンピックでの経験とJISSに望むこと」について講演した。若杉氏は期間中、コンディショニングプールと栄養指導、チームでミーティングルームを利用した。普段からJISSを利用していてもあり、期間中、ハイパフォーマンスサポートセンターが近くにあることで安心感が生まれたという。最後に若杉氏は、「私自身、JISSを利用してようになって競技力に良い影響が出ている。そのため、もっと多くの選手が利用できるような環境を作ってほしい。また、情報を手に入れるルートを整備してほしい」と話した。

羽田康司氏(筑波大学)は、「リオ2016パラリンピックにおける医学サポートとJISSに望むこと」について発表した。リオに出発する前、帯同する医師3名で薬品準備(リストアップ)から準備、梱包までを行った。かなりの時間を必要とするため、オリンピック同様パラリンピックにもスポーツファーマシスト

の関与が必要だと提言した。期間中は、選手村に診療室を2室用意し延べ327名の受診があった。特に多かったのは、皮膚外傷処置、筋骨格関節障害や褥瘡などの外科系だったという。羽田氏は今後の課題の1つとして、JISSクリニックでの障がい者アスリートの日常的な診療を挙げた。今まで、サポートを受けるという文化がなく利用して遠慮している選手が多いため、JISS等で恒常的に障がい者アスリートも受診利用できるように環境をより高めていってほしいと話した。

午前と午後の部の間には、JISSの医学サポート研究活動をまとめたポスターセッションも行われた。ここでは、研究員と参加者の意見交換が活発にされていた。

最後に、川原貴JISSセンター長が「リオ2016オリンピックで獲得した41個のメダルのうちカヌーの1個を除き拠点はすべてここにある。今後は、ここに拠点のない競技が練習を行う競技別強化拠点のつくり込みが必要。JISSやNTCのような施設は難しいので、地域の医・科学センターや大学との連携が大切になってくる。また、中央競技団体と地域の強化拠点が連携してジメテラからトップまでを育成できる仕組みを作っていかなければならない」と挨拶し、閉会した。



開会のあいさつ 大東 和美



シンポジウム① 梅林薫氏



窪康之



山下大地



亀井明子



大石益代



石毛勇介



笹代 純平



若杉遥氏



羽田康司氏



開会のあいさつ 川原 貴



ポスターセッション

シンポジウム②